

今年2月、小島理事はアフガニスタンを訪問し、円滑な事業実施のため、プロジェクトを視察したほか、同国の開発のあり方について政府関係者と率直な意見交換を行った。同国では、日本を含む主要ドナーと政府が連携・協調しながら新たな国づくりに取り組んでいる



本は、コスト面も考えながら、そうした援助効果も求めていくべきだと思えます。日本はプロジェクトを重視して援助を行っていますから、プロ

# わたしの視点

from JICA Leaders

## 日本の顔の見える援助協調

「援助協調」というと、多くの人が電気にしびれたようにハツとし、極端な議論を始めがちです。そこでは、それぞれの人の属する援助機関の歩んできた歴史や経験が反映されることとなります。私が日本で援助にかかり始めたのは1980年代末でした。当時「援助協調」という言葉はまだ使われていなかったかもしれないが、一緒にプロジェクトをやりませんか、といった誘いがアメリカや国際機関からたくさんありました。その後、全体的にドナーの予算が減少する中、より効果的・効率的に援助を行うていかなければならないという反省に基づいて、一つの開発計画の下でセクターごとに方針

を作り、ドナーが調整しながら援助を進めましょう、という流れにきています。その際、途上国のオーナーシップを尊重することはいつまでもありません。

ではなぜ日本が援助協調をするのか。もちろん、限られたリソースを有効に使うには一緒にやるのがいいですし、援助の重複・抜け落ちを防ぐことができます。また、税金を使うわけですから、効果・効率性を求めるのは当然です。問題となるのは「顔の見える援助」ですね。aid effectiveness（援助効果向上）を単純に人件費など投入のコストの問題にとらえると、日本人が活躍する場が狭くなるのではないかと心配する方がおられます。確かに、短期的にこうしたコストだけを重視すると、そうなるかもしれない。しかし、援助効果はこのようなコストの面だけでなく、投入がもたらす成果にも目を向けるべきです。日本やアジアでの開発の経験を踏まえた日本の強みをうまく生かすことで効果を高めることができると思うのです。日



K o j i m a

# 小島

JICA理事

こじま・せいじ

1972年外務省入省、86年アジア開発銀行上級法律顧問、89年経済協力局開発協力課長、90年経済協力局調査計画課長、93年アジア局地域政策課長、94年在インド日本国大使館参事官、96年同公使、97年在アメリカ合衆国日本国大使館公使、99年大臣官房審議官兼経済協力局、01年内閣府大臣官房通薬化学兵器処理担当室長（兼内閣官房通薬化学兵器処理対策室長）、02年在英国日本国大使館特命全権公使、04年10月にJICA理事就任。

S e i j i

# 誠二



昨年7月、小島理事は、来日したアブドゥラ・ジャネ国連開発計画（UNDP）アフリカ局長と対アフリカ援助におけるJICAとUNDPとの連携について意見交換し、ガバナンス、キャパシティ・ディベロップメント、平和構築など共通する関心分野で連携を促進していくことで同意した

## 援助協調は日本らしさを失うことではない

日本ではまだまだ知られていない「援助協調」だが、開発援助の世界では急速に進展している。援助協調における日本・JICAの課題を、小島誠二理事に聞く。

ジェクトの現場の声をドナー会合などで発信することができるといふ強みもあります。

日本国内では援助協調があまり知られていないので、その重要性を国内で理解してもらい、日本全体としてどうしていくのかを考えることが重要です。援助協調を担う人材の育成も必要です。語学力はもちろん、幅広い知識が求められる上、山のような報告書や資料を読みこなすし、コメントし、さらに日本の考えを発信する。これは一人でできることではないので、組織として体制を整備しなければなりません。最近では、公共財政管理など新たな技術協力ニーズも増えていますが、日本人専門家が途上国の財務省の人と一緒に考えながら能力向上を支援するのにも、「顔の見える援助」といえるでしょう。

## 日本の得意な分野でリードする

ヨーロッパのドナーの中には、援助のあるべき姿は一般財政支援で、プロジェクト型援助はやめるべきだという考え方が根強くあり、プロジェクト中心でやってきた日本の考え方が異なると思います。私はどちらにも改善していく余地があると思います。一般財政支援について、きちんとした評価はまだなされていませんし、信託リスクも指摘されています。他方、日本としても特定のプロジェクトだけをやればいいというものではなく、セクター全体に対する責任を持つ必要があるでしょう。プロジェクトの維持運営費を手当てし、援助の予測性を高める努力も必要でしょう。開発予算の一部を支援するとはいえ、ドナーが財政全体を見るのも重要なことで

す。ただし、途上国のオーナーシップを尊重しつつ、それをどこまでやるのか、バランスが難しいのだと思います。これからは、足を引っ張り合うのではなく、双方のメリット・デメリットに配慮した、建設的な議論を重ねていくことが大切でしょう。

また、援助協調という、皆が満足するようない一つの解決の道に自然に収斂する、と考えられがちですが、本心にそってでしょうか。開発のモデルや優先順位を決めるにしても、途上国内でもドナー間でも意見が分かれるでしょう。では日本はどうすべきかという、もちろん途上国のオーナーシップを尊重しつつ、得意な分野で日本の考え方を主張し、ほかのドナーを説得していくことだと思えます。そうした得意な分野、日本の強みを発信できるよ、JICAの国際協力総合研修所では、日本の援助の経験の理論化・普遍化に取り組んでいます。援助協調をやることは、日本らしさを失うことではないのです。

現場からは、相手国政府やほかのドナーがどんなことを考えているのか、発信してほしいですね。また、それぞれの援助モダリティが、それぞれの国の各セクターの個別具体的な問題の解決にどう役立っているのか、あるいは役立っていないのか、もっと共有し合うことが大事だと思います。

援助協調は、過去の経験の延長線に出てきたもので、まだまだ発展途上にあるといえます。これからいろいろな反省があつて、変化していくかもしれない。そういうことも含めて、日本は援助協調を戦略的に考えていかなければなりません。

なんぶ

## 援助協調に尽力した南部良一さんを追悼

3月13日、JICA東南部アフリカ地域支援事務所に勤務していた南部良一さんが急逝されました。南部さんは、大学卒業後、青年海外協力隊員としてザンビアなどで活動し、ケニアの日本大使館で専門調査員を務めた後、JICA職員となり、特にアフリカ地域への支

援に尽力してきました。また、外務省の援助協調・現地機能強化班長を務めたこともあり、日本の援助協調の取り組みに貢献し、現場でも重要な役割を担っていました。これからますますの活躍を期待されていたので本当に残念です。心よりご冥福をお祈りします。